中野重治全集

第十九巻

中野重治全集

第十九巻

筑摩書房

中野重治全集第十九巻
一九七八年六月三十日初版第一刷発行

著者　中野重治
発行者　岡山猛
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号一〇一―九一
電話〇三(291)七六五一(代表)
振替東京六―四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所
装釘　栃折久美子

© 1978 Shigeharu Nakano　Printed in Japan
0393-73319-4604

第十九巻　目次

わが先行者たち　一
わが国わが国びと　二七三

後記
著者うしろ書　なき数にいる名　六八七
解題　六九七

わが先行者たち

思い出断片　三
太田正雄さんの死　一一
言葉と思想　一四
木下杢太郎の人と藝術　一六
「暗夜行路」雑談　二九
上等ということ　六一
「或る男、其姉の死」　六五
むかしの読者　六九
坂の途中　七三
『ロダンの言葉』と『明るい時』　七六
自然主義との関係　七九
詩聖のおもかげ　八四
この白秋のいくつもの面　八五
『旅人』を読む　八七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『思ひ出』と『編笠』　八八
詩人としての河上肇博士について　八九
河上さんの詩　九七
一つの人格の全貌を　九九
『河上肇著作集』詩歌篇解説　一〇〇
『留守日記』を読む　一一〇
原鼎と河上さん　一一三
『片上伸全集』第二巻を読む　一一八
短篇小説の話　一二〇
無欲の人　一二五
「狐のわな」について　一二七
選集をもとめる　一二九
こういう形で読めるありがたさ　一三一
読むたのしみ　一三四
草餅の記　一三六
折口信夫さんについて　一三九

折口さんの印象　一四三
活字のまちがい　一四六
誘惑者　一五〇
折口信夫・釈迢空　一五三
「枸杞の実の誘惑」のこと　一五五
見るほうでなくて読むほうの本　一五八
朔太郎・春夫・犀星・辰雄・達治　一六一
「郷土望景詩」に現われた憤怒　一七三
妄想　一八四
『萩原朔太郎全集』　一八六
人のよさの記憶　一八六
きれぎれの思い出　一八九
註以前　一九三
萩原朔太郎展のために　一九五
個人的関係　一九六
小さい回想　一九九

無題　二〇五
「地獄変」を読む　二〇七
つまらぬ話　二〇八
芥川龍之介をおもう　二一三
芥川龍之介　二一三
三つのこと　二一七
痩せと肥え　二二三
芥川龍之介の「毛利先生」　二二四
「美しい村」のこと　二二九
ふるい人やさしい人　二三一
豊島与志雄　二三三
一刻人　二三四
この一刻人の文学　二三六
顔を持つてくる人　二三七
『松川裁判』の文体　二四一
広津和郎氏のこと　二四三

記憶断片　二四四
豪徳寺の時期　二四八
小倉金之助さん　二五一
自殺した文学作家　二五一
故人の手紙　二五四
そのとき徳田秋声と武者小路実篤とが顔を見合わせた　二六八

わが国わが国びと

わが国わが国びと　二七五
人さまざま　二九九
むかしのこと　むかしの人　三一六
折り折りの人　三三二
堀の死を聞いて　三四四
告別式に　三四五
ふたしかな記憶　三四六
堀辰雄のこと　三五二

Querschnitt　三五六
地球儀とローラー・スケート　三五七
野中の清水　三六〇
堀の『妻への手紙』を読む　三六〇
誇張をしない人　三六二
曖昧な記憶　三六四
日本人の心の一つの鏡　三六七
君に別れる　三六八
あわただしく　三七〇
三好達治の考え方　三七六
詩人としての三好達治　三七八
文明の人　三八七
世界がそのなかにある　三九〇
時とところ　三九三
高見順をおもう　三九四
解毒作用と腐蝕作用　三九九

親切な人　四〇〇
同世代の一人として　四〇三
同時代人ということ　四〇五
親しみの情　四〇八
無尽蔵を見せてもらう約束　四一一
二度会つた記憶　四一四
おぼろな記憶　四一七
文章温暖　四二一
実行をたつとぶ人　四二二
思い出断片　四二三
島木全集を迎える　四二五
豪徳寺の縁側で　四二六
金史良のために　四二九
因縁のようなもの　四三〇
『近代文学』の人びと　四三二
ある人の心の姿　四三七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

歴史と人間との関係　四三九
小田切秀雄の『民主主義文学論』印象　四四〇
小田切秀雄の人と学問　四四九
梅崎春生君　四五四
思い出すこと二、三　四六五
ひと口に言えぬところ　四六七
記憶断片　四七〇
杉浦明平の『作家論』　四七三
堀田善衛『橋上幻像』　四七五
私にとつての堀田善衛　四七五
堀田善衛小論　四七六
印象断片　四九五
『鶴』の世界　五〇一
『海』の訳者　五〇二
古代人的現代人　五〇三
久保田正文　五〇四

久保田正文『現代短歌の世界』　五〇五
人物　五〇六
ある時期の註釈　五〇七
やや時を経て　五一〇
教育ママ族の対極　五一四
『原爆詩集』について　五一八
峠三吉のこと　五二三
やわらかな印象　五二四
『峠三吉全詩集』うしろがき　五二六
許南麒詩集『朝鮮冬物語』跋　五二八
若さの清潔　五三一
西山安雄の文学　五三二
行きつ戻りつ　五三三
井上光晴について　五三四
井上光晴の特性　五三五
生活からの知恵　五三五

吉塚勤治君の生涯　五三七
『百姓の死』序にかえて　五三八
『三池の冬』序にかえて　五四〇
現場の人　五四三
大人の風格　五四五
金二十円也　五四八
自然な贅沢　五五二
伊藤至郎の死　五五三
椿山荘の夜　五五六
『司馬遷』と『吉野秀雄歌集』　五五八
吉野秀雄さんと有馬頼義君　五六三
椿の消毒　五六八
メモランドム　五七〇
ほんの少々　五七三
よつて件の如し　五七五
『新唐詩選』を読む　五七七

二つの『詩概説』　五八〇
儒ということ　五八五
そもそものころ　五八六
豊頬の人　五八八
新しい人　五九〇
未整理のままに　五九五
矢部友衛　五九六
同郷のよしみ　五九七
宇野重吉　五九九
柳兼子さんの唱うのを私ひとりで聴く　六〇〇
学習院五十年史　六〇三
藤沼栄四郎さんの死　六〇六
私の祝辞　六〇八
先輩であつて同僚　六〇九
とびとびの記憶　六一〇
この書の刊行について　六一三

布施杜生のこと　六二四
一騎当千の人　六二三
神山茂夫を語る　六二三
不可欠のもの　六二七
五十年と百五十三年　六四一
神山茂夫の死をお知らせする　六四二
はじめの挨拶　六四三
神山茂夫　六四六
推薦者の言葉　六四七
兼岩君の横顔　六四七
大崎栄太さん　六五二
松尾捨次郎さん　六五四
伊藤武雄さん　六五六
瀬戸茂三郎さん　六五八
天王寺悲田院の能瀬茂人さん　六六〇
恩人　六六三

いつ初めて私は彼を見たか　六六
古田晁君　六七
死なれて困る　六九
ひとり残る　七一
からだに気をつけよ、勉強せよ　七四
軽い意味でのふしあわせ　八三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com